

道徳推論と向社会的行動との関係 及びその媒介要因について*

望月 文明

1. はじめに

ジャン・ピアジェ (Piaget, 1932/65) とローレンス・コールバーグ (Kohlberg, 1969, 1971) が道徳推論の発達理論を展開して以来、この分野において数多くの研究が行われてきた。ピアジェとコールバーグの理論は、その後の多くの研究によって支持されているが、それと同時に多くの問題点も指摘されている。依然として議論されている問題の一つは、道徳推論と道徳の実行との間のシステムティックな関係の欠如である。この問題は、特に、ピアジェやコールバーグの理論では行動の側面にほとんど注意が払われていないと考える行動主義者や社会学習主義者たちによって指摘されてきた (例えば、Bandura, 1991)。このような立場にたつ心理学者は、道徳推論と道徳の実行は独立していると捉えて、それぞれが外的な条件付けによって習得されるものであると考えたり、あるいは、両者の関係性を認めても、道徳推論は道徳の実行に先立つものではなく、単なる事後的な合理化であると主張した。例えば、リットンら (Lytton, Manura, & Watts, 1987) の研究では、道徳推論のレベルが、言語に関する知能指数と高い相関を示したのに対して ($r = .43, p < .01$)、道徳の実行を示す指標

* 本稿は、著者がアメリカの Boston College における Educational and Developmental Psychology の修士課程を修了する際に提出した Critical Literature Review を翻訳したものである。

とはほとんど優位な相関が見られなかった。そのため、リットンらは道德推論が道德実行の規定因というよりも単に個人の言語能力を反映したものであると結論づけている。これに対して、認知心理学者たちは、道德の実行は、道德推論すなわち道德に関する理解やそれに伴う判断によって導かれるものだと考えた。

この推論と行動との関係を明らかにするために、これまで多くの研究が行われており、その結果、道德推論のレベルは、誠実さや社会規範の遵守、向社会的行動（一般に、人助けや思いやりの行動と考えられるもの）、非行など様々な行動と有意な相関があることが明らかにされている（Blasi, 1980）。しかしながら、これらの相関は統計学上有意ではあるものの、その関係はそれほど強いものではなく、道德推論のレベルが高いからといって必ずしも道德の実行が予測されるわけではないし、また高いレベルで実行されるわけでもない。コールバーグも両者のギャップを認めており、「道德を実行するには、道德的な判断が必要であるが、それだけで十分というわけではない」（Kohlberg & Hersh, 1977, p. 58）と述べている。一方で、先に述べたリットンらの研究でも、道德推論と道德の実行とが全くの無相関であったわけではなく、道德の実行を示す指標のいくつかは道德推論との間に優位な相関を示している。このように、道德推論と道德の実行との関係は不明瞭な部分が多く、研究の焦点は両者間の関係の有無から、両者を媒介する要因の探索へと移ってきている。

本稿では、道德推論と向社会的行動との関係を扱った研究を概観する。多種にわたる道德行動の中から向社会的行動を選んだのは、向社会的行動が、非行や社会規範の遵守などに比べて、より一般的であるためである。また向社会的行動は、幼児期・少年期から観察可能であり、発達の推移を調べるのにも適していると思われる。本稿では、はじめにナンシー・アイゼンバーグ（Nancy Eisenberg）の向社会的道德推論の発達理論を紹介し、彼女の一連の縦断的研究から道德推論と向社会的行動の関係に関する結果を要約する。次に道德推論と向社会

的行動との媒介要因に関する研究を個人内要因と状況要因とに分けてそれぞれ検証する。最後に、これらの研究における方法上の問題点や今後関係性が解明されることが期待される他の要因を挙げることによって、これからの研究への提言としたい。

2. 向社会的道德推論の発達理論

(1) 道德推論の発達理論

アイゼンバーグの向社会性の発達理論について述べる前に、彼女の理論に影響を与えたと思われるいくつかの道德推論の発達理論について簡潔に振り返ってみることにしたい。ピアジェ（Piaget, 1932/65）は、おはじきで遊ぶ子どもたちを観察し、児童のルール獲得に発達的な変化がみられることを発見した。ピアジェによれば、年少児がルールを他律的で無条件に従うべきであり、自ら変えることはできないものと捉えているのに対して、年長児になるにつれて、ルールが相対的であり、集団成員の合意があれば変更することも可能であることを理解するようになる。さらに、ピアジェはジレンマを含む物語を用いたインタビュー（臨床法）を行い、年少児が行動の意図に関わらず、客観的な行動の結果から善悪を判断しているのに対して、年長児の善悪の判断は、行動の動機や意図に基づいていることも発見した。このような違いから、ピアジェは道德に関する二つの発達段階を提唱し、第一段階として約10歳までを他律的な段階、第二段階である自律的な段階は約11歳から始まると考えた。また、このような道德推論の発達は、認知機能の発達と主要な対人関係が親から友達へと推移することによってもたらされると主張した。

ピアジェ同様、道德推論の発達には認知機能の発達と役割取得の機会が重要であると考えたコールバーグ（Kohlberg, 1969, 1971）は、道德ジレンマの物語を用いて、児童期後期から成人前期の人たちを対象にインタビューを行った。彼が用いた道德ジレンマの中で最も有

名な物語が「ハインツのジレンマ」(Kohlberg, 1971)である。この物語の中で、主人公であるハインツは、病床につき死期を間近に控えた妻を救うために高額な薬を手に入れようとするが、必要な金額の半分しかお金を集めることができず、薬屋の店員からも料金の後払いを断られてしまう。各被験者はこの話を読んだ後で、「ハインツは薬を盗むために夜中に薬屋に忍び込むべきか否か?」、また「どうしてそのように思うのか?」という問いに回答する。このようなインタビューを繰り返した後で、被験者の年齢によって異なる道德推論が用いられることに気がついたコールバーグは、ピアジェの発達段階を、三つの発達水準(水準毎に2つの下位段階がある)、すなわち、前慣習的水準、慣習的水準、脱慣習的水準へと発展させた。コールバーグによれば、道德推論が発達するにつれて、推論の基準は自己利益(前慣習的水準)から、他者の意見や社会規範などの客観的なもの(慣習的水準)、さらには、人権や正義感といった抽象的な信念や原理(脱慣習的水準)へと発達していく。

ピアジェとコールバーグに影響を受けたウィリアム・デーモン(Damon, 1977)は、児童期における道德推論と公正概念の発達に関する研究を行った。ここでいう公正さとは、「持ち物や報酬をいかに公平に分配するか」ということを意味しており、この公平な分配こそが対人関係の対立を防ぐ基礎となる、とデーモンは考えた。このように、道德の中の「公正さ」という部分に焦点をあてて研究が行われていることと、被験者の年齢層が4歳から8歳という児童期を中心にしたものであることが、デーモンの研究の特徴といえる。デーモンの研究でも、ジレンマ物語とインタビューからなる臨床法が用いられている。研究に使用された物語の一つは、学校のバザーの収益金をクラス内でどのように分配するかがテーマになっており、あるクラスが自分たちの描いた絵をバザーに出品し収益金を得るのだが、たくさん絵を描いた子どもとそうでない子ども、上手に描いた子どもと上手く描けなかった子ども、裕福な家庭の子どもと貧しい家庭の子ども、などク

ラスには様々な児童がいる、という内容のものである。この物語を聞かせた後で、デーモンはそのクラスの児童の間でどのように収益金を分配すればよいのかを被験者に尋ねている。質問の回答として得られた様々な分配方法とその理由を、デーモンは6つの段階(level 0-A, 0-B, 1-A, 1-B, 2-A, 2-B)にまとめて、公正概念の発達段階とした。それによれば、最も低い段階(level 0-A)では利益の分配方法とその理由は、児童の欲求だけが反映したものであるが、その後、利益は全員均等に分けるべきであると考えられる段階(level 1-A)を経て、最終的には集団成員の貢献度や事情などを考慮しながら分配方法を正当化しようになるという。

ピアジェ、コールバーグ、デーモンの理論は、その後の道德推論の研究に多大な影響を及ぼした。しかし、アイゼンバーグはこれらの理論が主に規範、権力、公正、正義などに焦点があてられており、道德性の向社会的な側面については触れられていないことを指摘し(Eisenberg & Mussen, 1987b)、同僚らとともに向社会性を評価するためのジレンマ物語を作成した。

(2) 向社会性に関する道德ジレンマ

アイゼンバーグは向社会的行動を「報酬を期待することなく、他者や集団を助けたり利することを目的とした行動」¹⁾と定義している(Mussen & Eisenberg, 1977, p. 3-4)。アイゼンバーグが向社会的道德推論の理論を展開する前から、人助けや寄付行為といった向社会的行動とコールバーグの道德発達段階との間では正の相関関係が確認されている(Blasi, 1980; Eisenberg & Fabes; 1998; Turiel, 1990)。しかしながら、コールバーグのジレンマ物語が主に法律や義務に焦点を当てているため、向社会性を測定するのに適当ではないと考えたアイゼンバーグは、独自のジレンマ物語を作成した。その中の「お誕生日

1) "actions that are intended to aid or benefit another person or group without the anticipation of external rewards."

会」というタイトルの物語は、主人公である子どもが友達の誕生日会に行こうとしている道中で、けがをして動けない子どもに出会うという内容のものである。この物語を話した後で、実験者は被験者に対して、主人公が誕生日会に行く代わりにその子の親を呼びに行くべきか否かの判断とその理由を尋ねる。この物語の他にもアイゼンバーグは次の3つの物語を使用した。「いじめ」の物語では、クラスメイトがいじめられている場面を目撃した時に助けるべきか否かを、「水泳大会」の物語では、身体障害者の水泳指導のために大会に出場する機会を辞退するべきか否かを、「洪水」の物語では、洪水の被害の後に限られた食料を他の人に分け与えるべきか否かを、被験者はそれぞれ判断し、またその理由を回答することになる (Eisenberg-Berg & Hand, 1979)。コールバーグのジレンマとは異なり、これらのジレンマでは自分自身と他者のうちどちらの願望や需要を充たすかを判断しなくてはならなくなっている。

(3) 向社会的道徳推論の発達段階

前述した4つのジレンマ物語を用いて、数多くの研究を行ったアイゼンバーグと彼女の同僚は向社会的道徳推論をいくつかの段階に分類した。代表的な5つの段階は、以下の通りである (Eisenberg-Berg & Hand, 1979, Eisenberg et al., 1991)。

レベル1 快楽主義的な推論：

向社会的行動を実行するか否かの判断が、自分自身の得る利益に基づいている。例えば、「ケーキを食べたりゲームで遊びたいから、けがをしている子を助けるよりもお誕生日会に行く」というような回答が該当する。

レベル2 他者のニーズに基づく推論：

他者の身体的、物質的、あるいは心理的なニーズが判断の理由と

なる。例えば、援助の介入の理由として「その子がけがをしているから」というような回答が該当する。

レベル3 他者からの承認、あるいはステレオタイプなイメージに基づく推論：

他者からの承認や善悪に関するステレオタイプなイメージによって判断が行われる。例えば、援助の介入の理由として「人助けはすばらしいことだから」というような回答が該当する。

レベル4 共感的な推論：

推論に共感、同情や役割取得の表現が含まれる。例えば、援助の介入の理由として「けがをしている子を見ると悲しくなるから」というような回答が該当する。

レベル5 内面化された規範や価値観に基づく推論：

個人に内面化された責任感や義務感から、援助の判断が下される。例えば、「人は困っている他者を見かけたら助けるべきである」というような回答が該当する。

20年以上にもわたる縦断的研究により、これらの推論使用の移り変わりには、いくつかの発達の傾向があることが明らかになっている (Eisenberg-Berg & Hand, 1979, Eisenberg et al., 1987, 1991, 1999)。例えば、「快楽主義的な推論」は、多くの幼稚園児あるいは小学校低学年児に用いられるが、11—12歳までに急激に使用頻度が減少する。「他者のニーズに基づく推論」は7—8歳まで使用頻度が増加し、その後は一定となる。「他者からの承認、あるいはステレオタイプなイメージ推論」は11—12歳ぐらいから、「内面化された規範や価値観に基づく推論」は15—16歳ぐらいになって、それぞれ使用する人が現れ始める、といった具合である。しかし、このような傾向があるもの

の、アイゼンバーグらは、これらの段階を、階層的で統合的な構造であるとは見なさず、また順不同であり、普遍的ではないと考えた (Eisenberg, 1986)。彼女らの縦断的研究では、青年期になってから、児童期の推論よりも低い段階の推論を使用する被験者が何人か確認されている。(そのような被験者のほとんどは男子であり、「快樂主義的な推論」の使用が12—16歳までの間に一時的に増加した)。

このアイゼンバーグらの一連の縦断的研究は、被験者数が32人と少なく、似たような境遇の人たちを対象としているため、この結果を異なる社会階層や民族へと一般化させることはできないかもしれない (Eisenberg et al., 1999)。また、ジレンマ物語は年齢によってその内容の意味が異なってしまう。例えば、「お誕生日会」の話に出てくるケーキやゲームは、青年期以降の人たちにはそれほど魅力的なものではないだろうし、幼児期・児童期の子どもたちには、水泳の大会で優勝することの重要性を、青年期以降の人たちと同じレベルで理解することができないであろう。しかし、このような欠点はあるものの、アイゼンバーグらの縦断的研究の結果は示唆に富んでおり、向社会的道徳推論の発達を理解する上で、重要なものであることに変わりはないといえよう。

3. 向社会的道徳推論と向社会的行動

(1) アイゼンバーグらの縦断的研究より

前述したアイゼンバーグらの縦断的研究では、向社会的道徳推論と向社会的行動との関係も調査されている (Eisenberg-Berg & Hand; 1979, Eisenberg et al., 1987, 1991, 1999)。これらの研究では、道徳推論の評定法は一定であるものの、向社会的行動はその内容や評価するための手順が異なっている。以下に幼児期、児童期、青年期に行った研究を概観する。

実験に参加した被験者32名が幼稚園児 (4—5歳) だった頃には、

向社会的行動の評定法として自然観察法が用いられている。各被験者は、6週間から11週間のあいだに、70回以上 (1回2分間) にわたって行動が観察された。ここで観察された向社会的行動は次の3つに分類されている。①分与——被験者の持ち物を、他者に対して分け与える、あるいはその一時的な使用を許すこと。②援助——他者の仕事を手伝うことや仕事に関する情報を与えること。③慰め——他者が悲しんでいる時に気分が良くなるよう努めること。また、被験者の向社会的道徳推論の評定法には、アイゼンバーグのジレンマ物語とインタビューによる臨床法を採用している。物語ごとに、使用された推論の頻度を累計し、その頻度の平均値を統計的に処理した結果、分与行動は「他者のニーズに基づく推論」と正の相関 ($r = .46, p < .005$) が、また「快樂主義的な推論」とは負の相関 ($r = -.37, p < .03$) がそれぞれみられた。しかしながら、援助や慰めなどの向社会的行動と推論との間には有意な相関が見られなかった。

次に、この被験者が小学生 (9—12歳) であった頃の研究では、実験的な状況下において各児童がどのような行動をとるかが評定されている。各被験者には、二つの異なる向社会的行動の機会が与えられた。そのうちの一つは、目の前で75枚の紙をばら撒いてしまった人を助けることであり (援助)、紙を拾っている時間と拾ってあげた紙の枚数が記録された。もう一つの機会は、恵まれない子どもへ匿名で募金することであった (寄付)。各被験者は簡単な作業を行った後で5セント硬貨を8つ受け取る。その後、実験者より恵まれない子どもたちのポスターを見せられ、そのような子どもたちのために受け取った報酬を募金することができることが告げられる。周りの人の目を気にしないですむように、各児童はいくらかお金の入った募金箱のある部屋に一人残される。この場合は寄付した金額が向社会的行動の指標となる。実験の結果は前回のものと似ており、寄付行為 (募金) は、「他者のニーズに基づく推論」と正の相関 ($r = .36, p < .044$) が、また「快樂主義的な推論」とは負の相関 ($r = -.38, p < .024$) がそれぞれ

みられたが、援助行為（散らばった紙を拾う）と推論との間には有意な相関が見られなかった。

被験者が青年期（13—16歳）の時の実験では、割り当てられた作業を終えて実験室を去る時に、各被験者は実験者より質問紙が渡され、それらに回答し一緒に渡された切手の貼ってある封筒に入れて送ることを頼まれる。実験者からは、「質問紙の記入と返送は必ずしなくてはならないことではないが、協力してもらえればとても助かる」ということが告げられ、質問紙が返送されたか否かが向社会的行動の指標となる。この結果、援助行為（質問紙の返送）は、「他者のニーズに基づく推論」と正の相関（ $r=.30, p < .015$ ）が、また「快樂主義的な推論」とは負の相関（ $r=-.28, p < .023$ ）がそれぞれみられた。

向社会的行動の内容とその評定法が異なるため、これらの縦断的研究の結果を単純に比較することはできない。しかしながら、これらの行動と「快樂主義的な推論」あるいは「他者のニーズに基づく推論」との間に一貫してみられる相関は、認知の働きが向社会的行動に影響を与えていることを示していると考えてよいだろう。これらの行動と他の向社会的道德推論の段階との間に相関が見られなかったのは、被験者数が少なく十分なデータが得られなかったためだと考えられる。幼児期、児童期においては援助行動が道德推論との間に有意な相関が見られなかったが、これは援助行動にかかるコスト（負担や労力、危険性など）が低かったためであるとアイゼンバーグらは考察している。例えば、被験者が小学生だった頃には、床に散らばってしまった紙を拾うことが求められたわけだが、これは物質的なコストのかかる募金と比べると、被験者に大きなコストはかかっていない。このようなコストの低い状況下では、認知的葛藤も生じないため、道德推論が援助するか否かの判断に反映されないことになる。

（2）向社会的道德推論とソシオメトリック・ステータス

向社会的道德推論と向社会的行動の関係を調べるにあたって、どの

ように個人の向社会的行動を評定するかという方法上の問題がある。例えば、実験状況下で取り上げられたある向社会的行動が、個人の日常の向社会的行動傾向を測定するものとして適切なものではないかもしれない。また、実験状況下では個人が日常とは異なった振る舞いをとることも考えられる。ビデオカメラを用いた自然観察法でさえ、カメラに気がついた子どもは普段とは異なった行動をとる可能性がある。このような点を踏まえると、友達によるソシオメトリック・テストは、個人の向社会的行動を測定するのに、よりふさわしいものであると考えられる。なぜなら、他者をよく助ける協力的な子どもは、友達からの評価が高いと思われるためである。

デコビックとゲリス（Deković & Gerris, 1994）は、友達から好かれている、あるいは嫌われていると評価された小学1、3、5年生の児童125名（男子63名、女子62名）に対して、アイゼンバーグの向社会的ジレンマ物語を用いたインタビューを行っている。デコビックとゲリスは、この好かれている児童と嫌われている児童との間で、道德推論、友達からの「よく助けてくれる」という評価、及び担任教員からの児童の向社会的行動の評価を比較した。その結果、友達から好かれている児童は嫌われている児童と比べて、これらの変数の全てにおいて有意に高かった（道德推論： $F=12.10, p < .01$ ；友達の評価： $F=96.68, p < .001$ ；担任教員の評価： $F=39.11, p < .001$ ）。さらに、この向社会的道德推論とソシオメトリック・ステータスとの相関は1、3、5年生の各学年で確認されており、5年生時の相関（ $r=.55, p < .001$ ）は、1、3年生時の相関（一年： $r=.30, p < .05$ ；三年： $r=.38, p < .05$ ）よりも強かった。

ベアーとライズ（Bear & Rys, 1994）の研究でも、デコビックとゲリスの研究と同じような結果が得られている。ベアーとライズは、133名の小学2、3年生（男子73名、女子60名）に対して、アイゼンバーグのジレンマを用いたインタビューに加えて、クラスメイトの中で「一緒に遊びたい人」と「遊びたくない人」をそれぞれ3人ずつ指

名させた。その結果、男子の場合、道徳推論のレベルはソシオメトリック・ステイタスと正の相関を示しており ($r=.41, p < .05$)、また階層的回帰分析の結果も同様に推論とソシオメトリック・ステイタスとの関係を支持している ($R^2=.18, F=16.02, p < .001$)。一方で、女子にはこのような有意な相関関係は見られなかった。

アイゼンバーグら (Eisenberg et al, 1988) の研究では、上記の研究とは異なる結果が得られており、向社会的道徳推論とソシオメトリック・ステイタスとの間には相関が見られなかった。この研究では、44人の幼稚園児 (4歳) がジレンマを用いたインタビューに参加し、また「よく助けてくれる人」、「よく物を分けてくれる人」、「大好きな人」、「嫌いな人」の4項目について、それぞれ3人ずつクラスメイトを指名した。また、アイゼンバーグらは360分以上にわたって (1週間に約40分ずつ、9週間) 園児の様子をビデオに収め、彼らの向社会的行動の頻度と園児同士の交流を記録し、さらに、クラスの担任教員には各園児の向社会的行動傾向に関する評価をしてもらった。その結果、向社会的道徳推論のレベルと担任教員の評価との間にだけ相関が見られ ($r=.43, p < .018$)、「大好きな人」及び「嫌いな人」に指名された児童と道徳推論や「よく助けてくれる人」に指名された児童との間には相関が見られなかった。

小学生を対象とした研究では、向社会的道徳推論とソシオメトリック・ステイタスとの間には正の相関があり、これは向社会的道徳推論と向社会的行動との関係を示唆しているといえるだろう。このような相関が、幼稚園児に見られなかったのは、彼らの認知能力が発達途上であるためだと考えられる。幼児期には、たとえ高い道徳推論の段階に基づいて行動をする児童がいたとしても、周りの児童の認知能力がそれを理解・評価できるほど成熟してはいないのだろう。実際に、児童の道徳推論のレベルは、認知能力が成熟している担任教員の評価とは相関関係を示している。デコビックとゲリスの研究において、低学年の児童に比べて高学年の児童の方が、道徳推論のレベルとソシオメ

トリック・ステイタスとの間の相関が強かったことも、認知能力の成熟度によって説明できる。また、ベアーとライズの研究では、女子の場合にこの向社会的道徳推論とソシオメトリック・ステイタスとの間に相関が見られなかった。しかしながら、この相関の欠如は性差によるものではないと思われる。ベアーとライズの研究では、「一緒に遊びたくない人」に指名された女の子がほとんどいなかったため、女子のデータの分布が大きく歪んでしまい、このデータの歪みが女子に有意な相関が見られなかった原因ではないかと考察されている。デコビックとゲリスの研究では、女子でも「好きな人」に指名された児童と「嫌いな人」に指名された児童の両方を扱っているため、データの分布に歪みが見られず、男子と同様に、推論とソシオメトリック・ステイタスとの間に相関が見られている。

4. 向社会的道徳推論と向社会的行動の媒介要因

向社会的道徳推論と向社会的行動の間には有意な相関関係があるものの、この相関関係は、社会規範の順守や非行など他の道徳に関わる行動と道徳推論との相関関係に比べて弱いことが指摘されている (Blasi, 1980)。この相関関係が比較的弱いことは、社会規範の順守や不良行為の制止とは異なり、向社会的行動が必ずしも義務を伴わないという性質であるためだと思われる。このように向社会的道徳推論と向社会的行動との間の相関関係が比較的弱いために、両者の間には多くの媒介要因が存在することが推測される。そこでこの章では、個人内要因と状況要因に分けて、いくつかの媒介要因について検証してみることにした。ここで紹介する研究の中には、道徳推論を扱っていないものもあるが、それらの研究で明らかにされた結果は、向社会的道徳推論と向社会的行動の媒介要因の可能性を示していると思われる。

(1) 個人内要因

① 年齢

先に紹介した研究では、デコビックは児童の年齢が高い方が向社会的道徳推論とソシオメトリック・ステイタスとの相関関係が強いことを報告した (Deković & Gerris, 1994)。しかしながら、ジャンセンと行ったその後の研究では、道徳推論と向社会的行動の相関は低学年児にだけ確認され、1994年に行った研究とは逆の結果となった (Janssens and Daković, 1997)。この研究では、125名の1、3、5年生児に対して向社会的道徳推論のインタビューを実施し、同時に担任教員による児童の向社会的性の評価とクラスメイトによるソシオメトリック・テストも行われた。その結果、3年生と5年生の道徳推論のレベルは1年生のそれよりも高かった (3年、 $F=9.11$, $p < .01$; 5年、 $F=10.99$, $p < .01$)。しかし、児童全体では、道徳推論と先生の評価 ($r=.17$, $p < .05$) 及び友達の評価 ($r=.20$, $p < .05$) 共に正の相関が見られたものの、学年別に見ると、この正の相関は1年生にのみ確認され (教員、 $r=.17$, $p < .05$; 友達、 $r=.20$, $p < .05$)、3年生、5年生には相関が見られなかった。ジャンセンとデコビックは、高学年児は自己中心的な動機は隠した方が良いことをしており、さらに援助を必要とする緊急性や被援助者の性格特性など、他の状況的な手がかりを考慮することができるため、道徳推論と向社会的行動との間に相関が見られなかったのではないかと考察している。

アイゼンバーグとマッセン (Eisenberg & Mussen, 1987b) は向社会的行動に関する数多くの発達的な研究を概観し、道徳推論と向社会的行動は年齢を経るにつれて、次第に関係が強くなると述べている。しかし、ジャンセンとデコビックの研究が示すように、加齢が与える影響は必ずしも一定ではなく、さらなる検討が必要であるといえるだろう。

② 共感性

向社会的行動に影響を及ぼす感情要因の一つとして、共感 (あるい

は同情) に関する研究がこれまで数多く行われており、それらの研究の大半は、両者の間の肯定的な関係を支持している。先に紹介したアイゼンバーグらの縦断的研究でも、共感と向社会的行動の関係は見られている。例えば、児童期における「恵まれない子どもへ匿名の募金する」($r=.38$, $p < .003$, Eisenberg et al., 1987) や、青年期における「追加の質問紙を記入することで実験者に協力する」($r=.33$, $p < .006$, Eisenberg et al., 1991) などの行動と被験者の共感性との間に有意な正の相関が見られた。その一方で、道徳推論と向社会的行動との関係と同様に、共感と向社会的行動の相関関係も、統計学的には有意であるもののそれほど強いものではないことも指摘されている。アイゼンバーグとマッセン (1987a) によるメタ分析を用いた研究では、向社会的行動の分散のうち、共感の変数が与える影響はたったの3パーセント程度であった。しかしながら、その後の研究により、向社会的道徳推論と共感との相互作用が向社会的行動の強い規定因となることが明らかにされている。ミラーら (Miller et al., 1996) は、74人の幼稚園児 (男子34人、女子40人) に対して、遊んでいる際に高い場所から飛び降りたため足にけがをしてしまう男の子と女の子のビデオを見せた。園児らはビデオを観た後で、自分がどのような感情 (例えば、悲しい、心配だ、不快だ、楽しいなど) であるかを報告した。その後、実験者は園児らに、けがをした子どもたちが入院していることを伝え、その子らが病室で遊べるようにクレヨンを仕分けして箱に詰めるよう頼んだ (向社会的行動)。さらに、その2-3週間後に園児らに対して向社会的道徳推論のインタビューを行った。この結果、「他者のニーズに基づく推論」と悲しみの感情との相互作用が、園児らの向社会的行動を予測することが明らかとなった ($F=5.43$, $p < .02$)。また下位分析の結果、推論のレベルと共感性の両方が高かった園児は、推論のレベルが高いが共感性の低かった園児よりも向社会的行動の傾向が強かったが ($F=6.19$, $p < .02$)、園児の推論のレベルが低い場合、即ち「快樂主義的な推論」を使用した園児は、共感性の高

低によって向社会的行動の傾向に差が生じなかった。

ナイトら (Knight et al., 1994) の研究でもミラーらの研究と同じような結果が得られている。ナイトらの研究には、86名の6-8歳の児童 (男子43名、女子43名) が参加し、実験者は児童に火傷をした女の子のビデオを見せた後に、その女の子のための募金を募った (各児童には事前に作業が割り当てられ、その報酬として5ドルが支払われていた)。この研究では、道徳推論の代わりに、感情推論 (不明瞭な感情に関する事柄の理解力) と金銭に関する知識 (通貨の単位や金銭の価値に関する理解力) が測定された。この他に各児童は、悲しんだり困ったりしている友達を見るとどの程度自分が悲しい気分になるかを5段階で回答している。募金額を基準変数とした階層的回帰分析の結果、3つの変数 (感情推論、金銭の知識、共感性) の主効果のみを従属変数とした場合は、それらの変数は募金行為 (向社会的行動) の分散の10パーセントしか影響を与えなかった ($R^2 = .10, F = 2.98, p < .05$)。しかし、3つの変数間の全ての相互作用を従属変数に加えた場合は、募金行為の分散の27パーセントに影響を与えていた ($R^2 = .26, F = 3.87, p < .01$)。つまり、道徳推論と共感との相互作用の影響力は強く、その効果は加法的であるというよりも乗法的であることが明らかとなった。

統計上は有意であったものの、道徳推論も共感もそれぞれ向社会的行動との相関がそれほど強くはなかったが、ミラーらやナイトらの研究は、道徳推論と共感との相互作用が向社会的行動の大きな規定因となることを示しており、認知と感情とが相補的な関係にあることが伺える。共感によって道徳推論は“人間味のある認知”へと変容し (Miller et al., 1996)、意図的に行われる向社会的行動を実行するためには、非意図的に得られた共感だけでは不十分であり、「自分が何をすべきか」を考える能力、すなわち道徳推論に依る部分が大きいのである (Blasi, 1999)。このような相互作用に関する研究の手順が、道徳推論と向社会的行動の他の媒介要因に関する研究にも適用される

ことが期待される。

③ 自己概念

ラリーューとマッセン (Larrieu and Mussen, 1986) は、自己概念のレベルと向社会的行動との間に肯定的な関係を見出している。この研究では76人の4年生児 (男子34人、女子42人) が37項目からなる自己概念の質問項目 (Piers-Harris Children's Self-Concept Scale) に回答し、またソシオメトリック・テストにより「公平に分配する人」、「困っている人を助けたり、慰める人」、「気づかいのできる人」をクラスメイトの中から指名させた。この結果、自己概念と友達の評価には正の相関が見られ、例えば、高い自己概念を持つ児童は「公平に分配する人」 (男子、 $r = .28$; 女子、 $r = .30, p < .05$) や「助けたり、慰める人」 (男子、 $r = .29$; 女子、 $r = .27, p < .05$) に選ばれる傾向が有意に高かった。

ブライアント (Bryant, 1983) も、自己概念のレベルと向社会的行動との関連を検証するための実験を行っている。この実験では、101名の3、4、5年生が実験者と共にボーリングゲームを行い、各児童はゲームの賞品として玩具と交換することができるチケットを受け取った。実験に参加した全ての児童は実験者とのゲームに勝つのだが、そのうちの半分の児童は実験者から誉められ、児童自身の技術の高さからゲームに勝ったと伝えられる (技術グループ)。一方、残りの半分の児童には、単に運が良かったからゲームに勝ったと実験者より伝えられる (偶然グループ)。ブライアントは、この実験において自らの技術の高さからゲームに勝ったと伝えられた技術グループの児童は、そうでない偶然グループの児童よりも、自己概念を高めることができた想定した。ゲームの後で、各児童は玩具と交換することができるチケットを同じ年の恵まれない子どもへと寄付するよう頼まれた。各児童は周りの目を気にすることなく寄付ができるように部屋に一人残された。最後に、全ての児童が「現在、どの程度幸せですか」、「現在、どの程度不幸せですか」という質問に回答した。実験の結果、

技術グループの児童は、偶然グループの児童よりもたくさん寄付をしたことが明らかになった ($F=12.89, p < .001$)。また、両者の間では「幸せ」だという回答に有意な差は見られなかったものの、技術グループの児童は偶然グループの児童よりも「不幸せ」だという回答が少なかった ($F=35.05, p < .001$)。

ラリーとマッセンの研究やブライアントの研究は、肯定的な自己概念と向社会的行動との関係を示しているといえる。向社会的行動を実行したことで自己概念が高まり、また自己概念の高まりが向社会的行動の次の機会へと良い影響を及ぼす、といったような過程が伺える。しかしながら、自己概念と道德推論との関係はまだ明らかになっていない (ラリーとマッセンの研究では、向社会的道德推論のレベルも測定されたが、両者の関係については言及されていなかった)。自己概念と道德推論との関係を明らかにし、その相互作用が向社会的行動に及ぼす影響を検証することにより新たな関係性が見えてくるだろう。

(2) 状況要因

① 向社会的行動にかかるコスト

向社会的行動には様々なタイプのものである。これらの行動は「他者や集団を助けたり利することを目的とした行動」(Mussen & Eisenberg-Berg, 1977, p. 3-4) という意味では共通のものであるかもしれないが、それぞれが持つ特徴によって諸行動の持つ意味は変わってくる。例えば、アイゼンバーグは、向社会的行動にかかるコストの違いによって、道德推論と向社会的行動の関係も変化しようと考えた。彼女らの縦断的研究では、児童らの向社会的道德推論のレベルが分配行動とは相関関係を示したのに対して、援助行動とはそのような関係が見られなかった (Eisenberg et al., 1987) が、アイゼンバーグはこのように分配と援助に違いが見られたのは両者にかかるコストの違いによるためだと考えた。すなわち、この研究では、分配行動 (募

金) には一定の物質的なコストがかかったが、援助行動 (紙を拾う) には実行するにあたってのコストはほとんどなかったため、認知的な葛藤が生じなかったのである。認知的な葛藤が生じなければ、援助実行の決断に道德推論が反映されず、その結果、推論と援助行動との間に相関関係が見られなかった、というのがアイゼンバーグらの考察である。アイゼンバーグとシェル (Eisenberg and Shell, 1986) は、この向社会的行動にかかるコストに焦点を当てて研究を行っており、コストのレベルと向社会的道德推論との関係を検証した。この研究では、56人の幼稚園児 (男子28人、女子28人) が参加し、向社会的道德推論のインタビューの後で、各児童に寄付と援助の機会が与えられた。この寄付行為と援助行為には、それぞれ高コスト条件と低コスト条件が設定されている。寄付行為は、各園児に予め渡されていたステッカーを、家庭が貧しくクリスマスのプレゼントがもらえない子どもへと分けてあげるといふものである。高コスト条件では、各園児が自分で選んだ10枚の異なるステッカーが渡されたが、低コスト条件では、実験者の選んだ10枚の同じ模様ステッカーが渡された。援助行為は、入院しているかわいそうな子どもたちが遊べるように、ゲーム用の紙を仕分けする作業である。高コスト条件では、各園児は作業するための紙の他に玩具も置いてある部屋へと一人で残されるが、低コスト条件では、作業用の紙だけが部屋に置いてある。この実験の結果、高コスト条件では、向社会的道德推論と寄付行為、援助行為の双方との間に相関関係が確認された (寄付: 快樂主義的、 $r = -.38, p < .01$, 他者のニーズ、 $r = .28, p < .05$; 援助: 快樂主義的、 $r = -.40, p < .05$, 他者のニーズ、 $r = .38, p < .05$)。その一方で、低コスト条件では、寄付行為、援助行為共に向社会的道德推論のレベルとは相関関係が見出されなかった。

アイゼンバーグらの研究が示すように、コストの低い向社会的行動には認知的な葛藤を引き起こさず、道德推論を必要としないものもあるだろう。道德推論と向社会的行動の関係について考える際には、取

り上げる向社会的行動のコストを念頭に入れる必要があるといえる。向社会的行動のコストに関しては、次のような問題も考えられる。アイゼンバーグの研究では、道徳推論とコストの高い行動との間に関係性が見られたが、あまりにも高いコストのかかる向社会的行動もまた道徳推論とは一致しないことが推定される。例えば、ある児童が「いじめ」のジレンマ物語に対して高いレベルの道徳推論を用いた回答をしても、実生活では、いじめっ子が大きく強くて自分も被害者になる可能性があれば、被害者を助けることを踏みとどまるかもしれない。また、向社会的行動のコストは、個人間で異なるだけでなく、同一人物でも状況によって異なってくる。一万円寄付するという行為のコストは、裕福な人と貧しい人とでは異なるし、給料日の前と後でも異なるだろう。

② 向社会的行動の受け手のニーズ

一般的に人は困っている人や能力の低い人を助ける傾向にある。このことを実証するためにラッドら (Ladd, Lange, and Stremmel, 1983) は、次のような実験を行った。この実験には、72人の1、4年生が参加し、実験者は各児童に彼らの同級生2人が作ったものとして一定の手順で結ばれた2本の紐を見せた。その後、各児童にはそれらの紐を結んだ同級生2人が放課後に引続きその作業をしなくてはならないことが伝えられ、その同級生2人のうち1人を手伝うように頼まれた。片方の紐はもう片方の紐と比べて上手く結ばれておらず、彼ら2人のうち1人はその作業を苦手に行っていることが明らかになっていた。この結果、実験に参加した児童の大半は作業を苦手としている同級生の援助を申し出ている (1年、 $F=4.78, p < .01$; 4年、 $F=9.77, p < .01$)。

実験状況における向社会的行動の受け手のニーズは、実生活に比べてわかり易い場合が多い。これは実験者が参加者に対して問題となっている状況を説明し、ニーズのある他者を助けるように頼むことが多いためである。これに対して実生活では、個人は他者が援助を求めて

いるのか、また求めている場合でもその人に問題を解決する能力はないのか、などの点について自ら理解した上で援助の介入を判断しなくてはならない。このような理解や判断には、高い認知能力が求められる。マッセイ (Mussey, 1977) の調査では、幼稚園児の93パーセントが「助ける必要のない人などいない」と回答しているが、高校生の73パーセントは、助けを求めている人、自尊心が高いため助けを求められない人、自分自身で解決できる人、他者を助けられない人など、相手によっては「助ける必要がない」あるいは「助けるべきではない」と回答している。

③ 傍観者の存在

傍観者の存在の有無もまた道徳推論と向社会的行動との間の差に関わっているのかもしれない。1964年、アメリカのニューヨークで、クリスティーン・キティ・ジェノビーズという女性が、自宅アパートの前の路上で暴漢に襲われ殺害された。近隣の38名の住民が彼女の叫び声を聞いたと報告しているのにも関わらず、誰一人として彼女を助けようとしたり、警察に通報したものはいなかった。アメリカのメディアはこのニュースを取り上げ、都会に住む人の冷淡さを訴えた。しかしながら、ラタネとダーリー (Latané and Darley, 1970) による一連の研究は、個人の援助介入の判断は、その人の関心やパーソナリティよりも、第三者の存在の有無により大きな影響を受けることを示唆している。彼らの研究では、第三者の数が操作されており、傍観者無しの条件では、被験者一人だけがトラブルに巻き込まれている人を助けることができる状況であるのに対して、傍観者有りの条件では、援助に介入できる人が他にも複数存在する状況となっていた。ラタネとダーリーの一連の研究を通じて、傍観者無しの条件の被験者は、傍観者有り条件に比べて援助を申し出たり、実験者に状況を報告する傾向が強かった。ラタネとダーリーはこのような現象が生じるのは第三者が存在することにより「社会的影響」と「責任の分散」が生じるためであると考察している。これは、緊急事態においてどのように振舞え

ばよいか迷っている人は、無反応な他者を見ることによって、その態度を参考にする傾向があるし（社会的影響）、その上、困っている人を助けなくてはならないという責任感、その場に居合わせた人たちの間で分散される（責任の分散）、ということである。

ラタネとダーリーは成人を対象に研究を行っているが、ピーターソン (Peterson, 1983) は児童を対象に同じような手順で実験を行っている。この実験では、101名の1、4、6年生（男子51名、女子50名）が参加した。各児童は個別に部屋へと招かれ、そこで他の児童とゲームをすることになっていた。その部屋は木製の衝立で区切られており、被験者である児童は同じ部屋の他の場所に一緒にゲームをする児童がいると思いついていた（実際には、その部屋には他の児童はいなかったのだが、実験者がそのフリをした）。ゲームが始まると実験者は部屋を去り、被験者である児童は他の児童にトラブルが生じたことを示す叫び声を聞く。実験に参加した児童のうち半分の児童は、自分しか被害者を助ける人はいないと思っていた（傍観者無し条件）のに対して、残り半分の児童は自分の他にも被害者を助けることができる児童がいると思っていた（傍観者有り条件）。その結果、傍観者無し条件の児童は、傍観者有り条件に比べて被害者を助けたり、実験者に報告する割合が有意に高かった。(F=10.94, p < .001)。

ラタネとダーリーやピーターソンの実験は緊急事態を扱ったものであり、このような危機的な状況では援助の介入に推論は反映せず、行動は無意識的なものとなるという説もある (Eisenberg and Shell, 1986)。しかしながら、たとえ緊急事態ではなくとも第三者の存在の有無は個人の道徳推論や向社会的行動に何らかの影響を与えられられる。これまで紹介してきた研究の中で、被験者に募金を促すものでは、実験者がその場に居合わせないケースが多いが、これは実験者の存在によってバイアスが掛かるのを防ぐためである。また単に第三者が存在するか否かだけでなく、第三者の立場や性格、第三者との対人関係も強く影響を与えられると思われる。

5. 方法上の問題点

これまで述べてきたように、多くの研究が道徳推論と向社会的行動との関係を示し、また両者の媒介要因を明らかにしてきた。しかし、たとえ全ての要因及び要因間の相互作用が明らかになったとしても、調査や実験に潜在する方法上の問題によって道徳推論と向社会的行動との関係が完全に解明されることはないかもしれない。道徳推論と向社会的行動の関係の研究にある方法上の問題点のうちいくつかは、何人かの心理学者たちによって明らかにされているが、ここではブラシ (Blasi, 1980) とサルツスタイン (Saltzstein, 1994) の論文の中で挙げられているものについて、それぞれ検証してみることにしたい。

(1) ブラシの論文より

ブラシ (Blasi, 1980) の指摘する方法上の問題は、多くの研究が質的に異なる道徳推論のレベルを量的に取り扱っていること、及び道徳推論と向社会的行動とは必ずしも一対一の関係にあるわけではなく、ある一つの行動が異なるレベルの推論によって支持されたり、ある推論レベルから2つ以上の異なる行動が導き出されることである。第一点目の問題点である道徳推論のレベルを量的に処理することに関しては、アイゼンバーグの道徳推論の評定法には該当しないと思われる。コールバーグの評定法を用いた多くの研究では、個人の複数のジレンマ物語への反応を点数化し、その平均点がその人の道徳推論のレベルとなる。例えば、ある人が2つのジレンマ物語に対して、第一段階の推論と第二段階の推論を使用したのであれば、その人の道徳推論のレベルは1.5ということになる。これに対してアイゼンバーグの評定法では、各道徳推論のレベルの使用回数を数え、その頻度の平均値が統計的に処理される。そのため、道徳推論の各レベルの間が量的に処理されない。つまり、「他者のニーズに基づく推論 (レベル2)」が「快

楽主義的な推論（レベル1）」よりも2倍高いことを意味していない。しかしながら、その一方でアイゼンバーグらの評定法を用いた研究は、主として「他者のニーズに基づく推論」と「快樂主義的な推論」の違いを扱ったものが多く、より高いレベルの推論に関するデータは依然として少ない。「共感的な推論（レベル4）」や「内面化された規範や価値観に基づく推論（レベル5）」の回答は青年期においても稀であるが、これらの高いレベルの推論と向社会的行動との関係を明らかにすることが、今後の課題の一つとして挙げられるといえるだろう。

もう一つの問題点として指摘されているように、ある一つの行動が異なるレベルの推論に支持されることや、あるレベルの推論が2つ以上の異なる行動を導くことは往々としてありうる。この道德推論と向社会的行動は対一の関係が成り立っているわけではないことは、両者の関係を扱う研究全般に対する根本的な問題である。高いレベルの向社会的道德推論をする人は、他者を助けることが結果としてその他者の不適当な部分を助長するような場合（例えば、怠惰により宿題をしていない友達に自分の回答を見せてあげるなど）には、援助の介入を差し控えるだろう。アイゼンバーグは、「向社会的行動の重要性は状況によって異なり、ある状況では援助や分与の行動が道德的となるが、そうはならない状況も存在する」と道德推論と道德行動の多様性を認めている（Eisenberg & Shell, 1986, p. 432）。その上、残忍な行為でさえ、時には実行者の道德推論によって支持されているとして、バンデュラは次のようにいっている。「人は自らの行動の道德性を正当化しない限り、非難されるような行動はしない。……咎められるべきことが認知的な処理を通じて正しいことへと変えられてしまうこともあるのだ」（Bandura, 1991, p. 35）。実証的な研究において、この推論と行動との全ての対応を実証することはきわめて困難である。だからといって、これまでの研究の結果が無意味であるわけではないのだが、我々はこのような潜在的な問題を常に意識しておく必要があ

るといえよう。

（2）サルツスタインの論文より

サルツスタイン（Saltzstein, 1994）は、道德推論の評定法と道德行動の評定法の違いに関するものとして、さらに2つの問題点を提示している。そのうちの一つは、仮説的な道德ジレンマにおける葛藤と実生活における葛藤の違いである。サルツスタインによれば、道德行動に関する研究は、他者の利益と自己利益を扱ったものといったように、道德と不道德との間の葛藤を含むものが多いものにも関わらず、同じ研究で用いられているジレンマ物語では2つの異なる道德原理の間の葛藤を扱っている場合が多い。この問題の指摘は主にコールバーグのジレンマ物語を用いた研究に対してのものだが、これはアイゼンバーグの評定法を用いたものには当てはまらない。なぜなら、アイゼンバーグのジレンマ物語では、主人公の願望、ニーズ、価値観と他者のそれらとどちらを充足されるかが問われており、向社会的道德推論では道德と不道德との間の葛藤を扱っていることになるためである。しかしながら、これはアイゼンバーグのジレンマ物語には、2つの異なる道德原理間の葛藤を扱ったものが欠けていることを示しているともいえるだろう。例えば、前述したラッドらの研究では、2人の級友のうちどちらか1人を助ける選択を被験者に求めている。ラッドらの研究の目的は道德推論と援助行動との関係ではなく、被援助者のニーズと援助行動との関係を検証することであったが、たとえ彼らの研究の中で向社会的道德推論のインタビューが実施されたとしても、道德推論と向社会的行動との間で扱っている葛藤が異なるために、推論のレベルは被援助者の選択とは関連が見られなかったかもしれない。このような2つ以上の異なる道德原理間の葛藤を扱っていないために、アイゼンバーグらの研究では、「共感的な推論」や「内面化された規範や価値観に基づく推論」といったより高い向社会的道德推論の回答が少なくなってしまう可能性も考えられる。

サルツスタインが挙げているもう一つの方法上の問題点は、道徳推論の評定法と道徳行動の評定法の視点の違いである。すなわち、個人は仮説的なジレンマ物語の中では他者（観察者）の視点を取るのに対して、実生活の向社会的行動では自分自身（実行者）の視点となる。このような違いは、判断が及ぼす結果と行動が及ぼす結果の違いを意味しており、一般的に行動が及ぼす結果は、判断が及ぼす結果よりも重大である場合が多い。この問題は、向社会的行動にかかるコストに関係していると思われるが、前述したように、「いじめ」の物語で高いレベルの推論を示しても、実際にはいじめられるのが怖くて被害者の援助の介入を踏みとどまってしまうことは、容易に推測できる。この方法上の問題点も、先の「道徳推論と道徳行動の関係の多様性」の問題と同様すぐに解決することは困難であり、ジレンマ物語を用いた臨床法が用いられる限り、これらの研究を解釈するにあたってこのような問題点が存在することを意識しておく必要があるといえるだろう。

6. まとめと今後の課題

本稿では、アイゼンバーグの向社会的道徳推論の発達理論を中心に、道徳推論と向社会的行動との関係の研究、その関係を媒介する要因の研究、またこれらの研究における方法上の問題点などを検証してきた。最後にこれらの主要な点をまとめて述べるとともに、今後の研究の課題を考えることにしたい。

(1) 向社会的道徳推論と向社会的行動について

向社会的道徳推論のレベルと向社会的行動との間には、統計学上の有意な相関を示す研究が多く、またこの相関関係は、児童期から青年期後期にかけて一貫して見られた。しかしながら、この相関関係はそれほど強いものとはいえず、さらに「快楽主義的な推論」や「他者の

ニーズに基づく推論」という低いレベルの推論との関係は十分に確認されているものの、「共感的な推論」や「内面化された規範や価値観に基づく推論」などの高いレベルの推論との関係は、さらに多くのデータが必要であるように思われる。高いレベルの向社会的道徳推論が十分に得られなかったのは、単に児童や青年の認知能力が発達途上であるためだけでなく、日常生活においてそのような高レベルの推論を必要とする状況に遭遇する機会が少ないことが考えられる。また他の可能性として、インタビューに用いられる向社会的道徳ジレンマの物語が、基本的に自分と他者との利益の葛藤を取り扱っており、そのような物語の持つ性質が高レベルの道徳推論の回答を阻んでいるのかもしれない。これらの点を踏まえ、高レベルの向社会的道徳推論と向社会的行動との関係についてさらなる研究が求められているといえるだろう。

(2) 向社会的道徳推論と向社会的行動の媒介要因について

向社会的道徳推論と向社会的行動の媒介要因の中で最も研究が進んでいるのは共感に関するものである。共感とは道徳推論との相関関係だけでなく、それらの相互作用がどの程度向社会的行動へと影響を与えるかが明らかにされており、このような研究が他の媒介要因に関する研究へと応用されることが期待される。また、他の媒介要因として考えられる「被援助者のニーズ」や「傍観者の存在の有無」などに関する研究も紹介したが、これらの要因は道徳推論との関係が検証されていない。総じて、個人内要因と比べると状況要因に関する研究の方が遅れている印象を受けるが、アイゼンバーグが指摘したように、向社会的行動の意義は状況によって異なり、ある行動が状況によって道徳的になったり、不道徳になったりするのであれば、本稿で挙げられたもの以外の状況要因についての研究もさらなる発展が期待される。

(3) 方法上の問題点について

ブラシやサルツスタインが指摘したように、道德推論と向社会的行動との間に生じる差は、それぞれの評定法における方法上の問題点に拠る部分もあると考えられる。「道德推論と向社会的行動との関係の多様性」や「推論の評定法と行動の評定法との視点の違い」などの問題は、すぐには解決されない問題であり、研究の結果を解釈する側にも常に意識されておくべきものであるといえるだろう。また、向社会的道德推論と向社会的行動の関係は、主にその相関関係によって表されてきたが、相関関係は両者の因果関係を示すものではない。そのため向社会的道德推論が向社会的行動を導いているとは言いきれず、この因果関係を明らかにするためには異なる研究方法が必要となる。その一方で、道德推論も過去の行動や経験によって影響を受けることも忘れてはならない。例えば、コールバーグ (Kohlberg, 1984) は、道德推論とソシオメトリック・ステイタスとの関係が一方的なものではないと述べており、高いレベルの道德推論がソシオメトリック・ステイタスを高める一方で、友達との交流が道德推論のレベルを高める一つの要因でもあることを認めている。

(4) 今後の研究課題として考えられる媒介要因について

ブラシ (Blasi, 1983) は、個人の過去の経験において道德推論と行動とが一致しなかった場合、すなわち「すべきことをしなかった」あるいは「すべきではないことをした」時に生じる罪悪感がその後の道德推論や道德の実行へと影響を与える可能性を示唆した。これは今後検討されるべき重要な媒介要因であるように思われる。これに加えて、向社会的道德推論と向社会的行動の関係においては、羞恥心も罪悪感と似たような影響を与えることが推測される。以前、他者を助けようとして失敗したり、あるいは被援助者より援助を拒絶された経験を持つ個人は、その後援助の介入をためらう傾向が強まるのではないだろうか。リアリィとコワルスキー (Leary & Kowalski, 1995) に

よれば、たとえ援助の介入が上手くいった場合でも、目立ったり誉められすぎることによって、個人は羞恥心をおぼえるそうである。罪悪感や羞恥心などの過去の経験が、その後の道德推論や道德の実行にどのように影響を与えるか、という問題は、単に推論と行動との関係を説明するだけでなく、道德推論の発達段階間のプロセスや効果的な道德教育にも大きな示唆を与えることだろう。

これまで述べてきた通り、道德推論と道德行動との関係は、その間に多くの媒介要因を有し、大変複雑なものである。現時点では、両者の関係を完全に把握することが困難であるが、さらなる媒介要因の研究は、その関係のより良き理解へと導いていくと思われる。また媒介要因を含んだ道德推論と道德の実行との関係の理解をいかに効果的な道德教育へと結びつけていくのかということも、今後の課題の一つである。例えば、本稿では個人の道德推論と共感との相互作用が向社会的行動の実行に大きな影響を及ぼすことを示唆する研究を紹介したが、認知と感情とを関係づけることを念頭においた道德教育について考える必要があるように思われる。

引用文献

- Bandura, A. (1991). Social cognitive theory of moral thought and action. In W. M. Kurtines and J. L. Gewirtz (eds.), *Handbook of moral behavior and development. Vol. 1 Theory*. Hillsdale, N. J. Erlbaum.
- Bear, G. G. & Rys, G. S. (1994). Moral reasoning, class behavior, and sociometric status among elementary school children. *Developmental Psychology*, 30(5), 633-638.
- Blasi, A. (1980). Bridging moral cognition and moral action: A critical review of the literature. *Psychological Bulletin*, 88(1), 1-45.
- Blasi, A. (1983). Moral cognition and moral action: A theoretical perspective. *Developmental Review*, 3, 178-210.
- Blasi, A. (1999). Emotions and Moral Motivation. *Journal of the Theory of Social Behavior*, 29(1), 1-19.

- Bryant, B. K. (1983). Contexts of success, affective arousal, and generosity. *American Educational Research Journal*, 20(4), 553-562.
- Damon, W. (1977). *The social world of the child*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Dekovic, M., & Gerris, J. R. M. (1994). Developmental analysis of social cognitive and behavioral differences between popular and rejected children. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 15(3), 367-386.
- Eisenberg, N., Cameron, E., Pasternack, J., & Tryon, K. (1988). Behavioral and sociocognitive correlates of ratings of prosocial behavior and sociometric status. *Journal of Genetic Psychology*, 149(1), 5-15.
- Eisenberg, N., & Fabes, R. (1998). Prosocial Development. In W. Damon and N. Eisenberg (Eds.) *Handbook of child psychology (5th ed.)*, vol. 3, (pp. 701-778). New York: Wiley.
- Eisenberg, N., Guthrie, I. K., Murphy, B. C., Shepard, S. A., Cumberland, A., & Carlo, G. (1999). Consistency and development of prosocial dispositions: A longitudinal study. *Child Development*, 70(6), 1360-1372.
- Eisenberg, N., & Hand, M. (1979). The relationship of preschoolers' reasoning about prosocial moral conflicts prosocial behavior. *Child Development*, 50, 356-363.
- Eisenberg, N., & Miller, P. A. (1987a). The relation of empathy to prosocial and related behavior. *Psychological Bulletin*, 101, 91-119.
- Eisenberg, N., Miller, P. A., Shell, R., McNally, S., & Shea, C. (1991). Prosocial development in adolescence: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, 27(5), 849-857.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. (1987b). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press. 菊池章夫、二宮克美 (訳) (1991)、【思いやり行動の発達心理】、金子書房
- Eisenberg, N., & Shell, R. (1986). Prosocial moral judgment and behavior in children: The mediating role of cost. *Personality & Social Psychology Bulletin*, 12(4), 426-433.
- Eisenberg, N., Shell, R., Pasternack, J., Lennon, R., Beller, R., & Mathy R. M. (1987). Prosocial development in middle childhood: A longitudinal study. *Developmental Psychology*, 23(5), 712-718.
- Janssens, J. M. A. M., & Dakovic, M. (1997). Child rearing, prosocial moral reasoning, and prosocial behavior. *International Journal of Behavioral*

- Development*, 20(3), 509-527.
- Knight, G. P., Johnson, L. G., Carlo, G., & Eisenberg, N. (1994). A multiplicative model of the dispositional antecedents of a prosocial behavior: Predicting more of the people more of the time. *Journal of Personality & Social Psychology*, 66(1), 178-183.
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. A. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research* (pp. 347-480). Chicago: Rand McNally.
- Kohlberg, L. (1984). *Essays in moral development: Vol. II*. San Francisco: Harper & Row.
- Kohlberg, L., & Hersh, R. (1977). Moral development: A review of the theory. *Theory into Practice*, 16, 53-59.
- Ladd, G. W., Lange, G., and Stremmel, A. (1983). Personal and situational influences on children's helping behavior: Factors that mediate compliant helping. *Child Development*, 54, 488-501.
- Latané, B., & Darley, J. M. (1970). *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Meredith. 竹村研一、杉崎和子 (訳) (1997)、【冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学—】、ブレーン出版
- Larrieu, J., & Mussen, P. (1986). Some personality and motivational correlates of children's prosocial behavior. *Journal of Genetic Psychology*, 147(4), 529-542.
- Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1995). *Social Anxiety*. New York: Guilford Press.
- Levin, I., & Beckerman, R. (1980). Moral judgment and moral behavior in sharing. *Genetic Psychology Monographs*, 101(2), 215-230.
- Lytton, H., Manula, S. R., & Watts, D. (1987). Moral judgment and reported moral actions: A tenuous relationship. *Alberta Journal of Educational Research*, 33(3), 150-162.
- Miller, P. A., Eisenberg, N., Shell, R., & Fabes, R. A. (1996). Relation of moral reasoning and vicarious emotion to young children's prosocial behavior toward peers and adults. *Developmental Psychology*, 32(2), 210-219.
- Mussen, P. & Eisenberg-Berg, N. (1977). Roots of caring, sharing, and helping: The development of prosocial behavior in children. San Francisco: W. H. Freeman.
- Mussey, P. M. (1977). An analysis of children's helping behaviors as related

- to moral development (Doctoral dissertation, University of Tennessee, Knoxville, 1976). *Dissertation Abstracts International*, 37, 4223B.
- Peterson, L. (1983). Role of donor competence, donor age, and peer presence on helping in an emergency. *Developmental Psychology*, 19 (6), 873-880.
- Piaget, J. (1932/1965). *The moral judgment of the child*. New York: Free Press (Original work published 1932).
- Saltzstein, H. D. (1994). The relation between moral judgment and behavior: A social-cognitive and decision making analysis. *Human Development*, 37 (5), 299-312.
- Turiel, E. (1990). Moral judgment, moral action, and development. In D. Schrader (Ed.). *The legacy of Lawrence Kohlberg*, (pp. 37-57). San Francisco: Jossey-Bass.